

MUSEUM LIBRARY ARCHIVE

ミュージアムの中のライブラリで
アーカイブについても考えた

体験的MLA連携論のための点綴録

水谷 長志 Takeshi MIZUTANI

樹村 房

目次

| | |
|---|---|
| 序 ミュージアムの中のライブラリでアーカイブ*についても考えた — 来るべき「博物館情報・メディア論」への助走として ————— | 1 |
| 1. 濫觴と普請中 — MLA 連携の起源 | 1 |
| 2. 「博情館」事始め | 2 |
| 3. 学芸員養成課程の「博物館情報・メディア論」と本書 | 4 |
| 4. ミュージアムにおける専門職能の職域の拡張 | 6 |
| 5. 本書の構成とねらい | 8 |

第1部 ミュージアムの中にライブラリを開く

第1部 解題

第1章 ミュージアム・ライブラリの原理と課題

| | |
|--|----|
| — 竹橋の近代美術館で学んだ5つの命題から ————— | 18 |
| はじめに — 5つの「命題」から学んだこと | 18 |
| 1. ARLIS ファウンダー, TF の命題から学んだこと — その1 つながること | 19 |
| 2. ARLIS ファウンダー, TF の命題から学んだこと — その2 多様性 | 20 |
| 3. アメリカのアート・ミュージアム・ライブラリアンの先駆者, JW の一生から学んだこと — 一人図書館員の悩みと矜持 | 22 |
| 4. NAL, V & A の館長 JvW との対話を通して学んだこと — な ぜ, ARLIS/Japan ではなかったのか? そして, 「MLA 連 携」の萌芽的提起へ | 26 |
| 5. AL & AA, MoMA 館長 CP の問いかけから学んだこと — 部 分と全体: あるいは分担/分散と集中, そして, ナショナル・ アート・ライブラリの理念から見直す現実的課題について | 29 |
| おわりに — IFLA という傘のもとに | 34 |

| | |
|---|----|
| 第2章 東京国立近代美術館本館の情報資料活動 | 37 |
| 1. はじめに | 37 |
| 2. ライブラリの空間を求めて | 37 |
| 3. 資料収集の沿革 | 40 |
| 4. 書誌および年譜等編纂事業 | 40 |
| 5. 美術情報システムの構築 | 41 |
| 6. アートライブラリの開室と多角的美術情報提供システムの展開 | 43 |
| 7. アーカイブとエフェメラおよび貴重書 | 48 |
| 8. 課題と展望 | 51 |
| 第3章 第1部のための補論 | 54 |
| 第1篇 一年前の夏, IFLA 東京大会をふり返って—美術図書館 分科会を中心に | 54 |
| 第2篇 ミュージアム・ライブラリの可能性—人と情報のネット ワーキングのもとに | 59 |
| 第3篇 夢の砦—展覧会カタログのために | 67 |
| 第1部に関連するその他の著者著作情報 | 69 |

第2部 アート・ドキュメンテーションと MLA 連携

第2部解題

| | |
|--|----|
| 第4章 アート・ドキュメンテーションと MLA 連携—語の定義の試み | 77 |
| 1. アート・ドキュメンテーション | 77 |
| 2. MLA 連携 | 80 |
| 第5章 極私的 MLA 連携論変遷史試稿 | 84 |
| 1. はじめに—共通言語となった「MLA 連携」 | 84 |
| 2. MLA 連携とは—MLA の分化という総合の喪失から総合の回復 へ向かうこと | 85 |
| 3. アートアーカイブの発見から2つの MLA 連携へ | 86 |
| 4. MLA 連携の展開 | 91 |
| 5. MLA の同質と差異 | 94 |

| | |
|--|------------|
| 6. デジタルアーカイブの課題あるいは場所としての MLA との往還 トボス | 98 |
| 第6章 MLA 連携のフィロソフィー — “連続と侵犯” という — | 102 |
| 1. MLA 連携の濫觴 | 103 |
| 2. アート・アーカイブとの遭遇 | 104 |
| 3. MLA 連携の2つのトライアングル | 106 |
| 4. “連続と侵犯” という MLA 連携のフィロソフィー | 111 |
| 第7章 MLA 連携 — アート・ドキュメンテーションからのアプローチ — | 115 |
| 1. 「災後」を生きる — 前言 | 115 |
| 2. 「MLA 連携」とは何か? | 116 |
| 3. アート・ドキュメンテーションにおける MLA 連携 | 118 |
| 4. MLA 連携を支える規範と技術 | 123 |
| 5. 施策としての MLA 連携の可能性 | 124 |
| 6. おわりに — 震災復興と地域資料, そして MLA 連携 | 125 |
| 第8章 第2部のための補論 | 133 |
| 第1篇 アート・ドキュメンテーション研究会の発足にあたって | 133 |
| 第2篇 第1回アート・ドキュメンテーション研究フォーラム 「ミュージアム・ライブラリ・アーカイヴをつなぐもの — アート・ドキュメンテーションからの模索と展望」 — シンポジウムの開催にあたって | 136 |
| 第3篇 MLA 連携に係る3書(2010-2011)のための書評 | 141 |
| 第2部に関連するその他の著者著作情報 | 147 |

第3部 アート・アーカイブ

第3部解題

| | |
|--|-----|
| 第9章 アート・アーカイブを再考するということ レビュ- | |
| — 「作品の「生命誌」を編む」に与って — | 154 |
| はじめに — アート・アーカイブを再考するということ レビュ- | 155 |
| 1. MLA 連携〔論〕を素地としてアート・アーカイブを定置する | |

| | |
|--|------------|
| 試み | 159 |
| 2. 発現—アート・アーカイブの集積の「夥しさ」から立ち上がるもの | 163 |
| 3. MとLの間であって膠着体となるアート・アーカイブ | 171 |
| 4. MLA連携の事例を探すプロセスから | 175 |
| 5. 作品の「生命誌」を編む—受容史を生み、育むアート・アーカイブ | 183 |
| おわりに—謝辞にかえて | 186 |
| 第10章 第3部のための補論 | 190 |
| 第1篇 特集「アート・アーカイヴ」にあたって | 190 |
| 第2篇 エフェメラへ向かう—美術館の中のライブラリでライブ リアンが愛すべき難敵 | 192 |
| 終章 MLAを越えて—新たな調査研究法としてのMLAからSLAへ | 195 |
| 1. はじめに—本稿の由来と成立 | 195 |
| 2. 博物館情報・メディア論および図書館基礎特論におけるMLA 連携の展開と課題レポート | 201 |
| 3. MLA連携の拡張—一般・敷衍化としてのSLA連携への展開 の試み | 208 |
| 4. おわりに—跡見花陰諸関連資料におけるMLA連携の可視化 に向けたシステム構築への展望 | 210 |
| 第3部に関連するその他の著者著作情報 | 215 |
| | |
| あとがき | 217 |
| 索引 | 221 |

*archivesの日本語表記は原則「アーカイブ」を採るが、初出のあるものについては、その表記を踏襲した。

序

ミュージアムの中のライブラリで アーカイブについても考えた 来るべき「博物館情報・メディア論」への助走として

1. 濫觴*と普請中 — MLA 連携の起源

やはり、ミュージアム、ライブラリ、アーカイブの連携、MLA 連携は、近代の宿命たる専門分化の超克としての総合の喪失の回復であると考ええる。

2023 (令和5) 年の酷暑の夏、本書の原稿を用意する中で、同年春に刊行の長尾宗典著『帝国図書館 — 近代日本の「知」の物語』(中公新書・2749) の書評¹を書いていた。

JR 御茶ノ水駅^{ひじりぼし}の聖橋口^{らん}に立つと決まって思い出す二つの語がある。「濫觴^{しょう}」と「普請中^{ふしんちゆう}」である。昔、この駅に父と降り立ったのはたぶん小学校の四年生のときだった。それからもう半世紀以上、この駅に馴染んできた。お茶の水橋口の駅舎はウィーン分離派のモダニズム建築のいまに残る稀少な実例だが、茗溪通りに面して雑居する飲食店の並びも、いまは神田川に迫り出して拡張しようとする光景にも、いつも普請中を感じてしまう。変わらないのは珈琲穂高くらいだ。

聖橋口の聖は、橋を渡ってすぐにある樹影深い湯島聖堂に因むことは誰もが知っているが、ここの中の大成殿が1872 (明治5) 年以來、日本近代におけるほとんどすべての官制文化文教施設の源、濫觴の地であったことはあまり顧みられてはいないのかもしれない。1897 (明治30) 年に設立された帝国図書館もまたその淵源を、ここ湯島聖堂大成殿における文部省博物館博覧会に遡ることができる。

ここに『帝国図書館』の書評の冒頭の二段落を引用したのは、日本の MLA の濫觴が、1872 年の湯島聖堂大成殿にあり、一曜斎国輝の錦絵《古今珍物集覧》は分化していく前の混沌の中にある総合が示されていたことを確認するためであるし、「普請中」は森鷗外の掌編のタイトルでもあるのだが、後に鷗外は、帝室博物館総長兼図書館頭となり、いま東京国立博物館平成館へのアプローチに顕彰のパネルが建てられている。

《古今珍物集覧》に描かれた模様は、大英博物館の誕生の現場に酷似しているだろう。

近代がこれを分化解体した先に、21世紀のわたしたちは MLA を貫く知の総合を、^{やかた}館の壁を越えてすべてを把握したいというボルヘスの夢を共有し、志向している。

ヨーロッパーナ (Europeana²) も DPLA (Digital Public Library of America³) も ジャパンサーチ⁴ も、願うところは、この総合の回復なのではないだろうか。

拡張するこの意思の顕現においては、すでに部分であるとも言えようが、その起源において提出を試みたのが MLA 連携であったことを「体験的 MLA 連携論のための点綴**録」として記録したのが本書である。

2. 「博情館」事始め

ここは〔国立民族学〕博物館とはいいますが、ひろくものをあつめているのではなく、ひろく情報を集めている。だから博情報館—博情館だとわたしはいつている（笑）。ここは情報のかたまりなのです⁵。

梅棹忠夫が1985（昭和60）年11月19日、雑誌『コンピュータピア』の編集長に語った言葉である。後に『情報の文明学』（中公叢書、1988）に再録されて、「博物館から博情館」への小見出しも付けられていた。ここにある「（笑）」について、実はこの「博情館」の造語は、同館の建築設計者である黒川紀章によるもので、1977（昭和52）年11月の『月刊みんぱく』に載った「回遊式博物館の原理」と題した対談において、「わたしはこの民族学博物館は博物館というよりも「博情館」だとおもうんです」と記録されている。後日刊行の、梅棹の

編になる『民博誕生 館長対談』（中公新書、1988）にも収録されている。

梅棹は黒川によるこの造語をいたく気に入って、以来、さかんに多用しているし⁶、「創設以来11年目をむかえた国立民族学博物館のことを「知的生産の巨大技術」とわたしはいつているんです。全面的に情報化をすすめました」とも述べている⁷。

今日のミュージアムの所蔵品のデータベースやデジタルアーカイブの構築・公開は、黒川・梅棹が先陣を切って提唱した「博情館」の延長の上にあるし、梅棹館長の民博のメタデータ・データベースは、『知的生産の技術』のカードの思想に根ざしていることだろう。

『情報の文明学』が出版された1988（昭和63）年は、独立行政法人化以前の、文化庁施設等機関であった国立博物館、国立美術館および国立文化財研究所が合同で、ミュージアムの情報化をめぐる、はじめて科研費を得ていた頃であった。

1986-87（科研〔特定研究1〕）：「国立の博物館・美術館資料に関する情報処理ネットワークシステムの整備に関する調査研究」

1988-90（科研（総合研究A））：「博物館・美術館資料に関する情報交換のためのプロトコルの研究」

この流れにあって、筆者には、梅棹の民博に登場した最新鋭のビデオテープが、『情報の文明学』を実体化したような、未来図の先取りのように輝いても見えたものだった。

文化庁傘下の機関においても、時勢を追いかけるように、1989（平成元）年の4月に「全国文化財情報システム調査研究会」を発足させて、東京国立博物館の先導により企画構想された「文化財情報システム」ならびに「共通索引」が後々の「文化遺産オンライン⁸」へと繋がるわけなのだが、実際に各館、各所でサーバーが立ち上がり、インターネットにまがりなりにも各々独自のドメイン名のホームページが開かれたのは、日本におけるインターネット元年と言われる1995（平成7）年のことであった。

梅棹・黒川の対談から間もなく半世紀が経つほどに時間は流れたが、2022

(令和4)年の博物館法の改正によっても、ミュージアムの「博情館」への道がまた一歩進んだ。

博物館法の一部を改正する法律の公布について(通知)令和4年4月15日⁹
第1 法律の概要 3 博物館の事業

(1) 博物館が行う事業に、①博物館資料に係る電磁的記録を作成(デジタル・アーカイブ化)し、公開すること、②学芸員その他の博物館の事業に従事する人材の養成・研修を行うことを追加すること(第3条第1項第3号及び第11号関係)

第2 留意事項 3

第3条第1項第3号に定める博物館の事業としての「博物館資料に係る電磁的記録を作成し、公開すること」については、デジタル技術を活用した博物館資料のデジタル・アーカイブ化とその管理及びインターネットを通じたデジタル・アーカイブの公開、インターネットを通じた情報提供と教育や広報、交流活動の実施や展示・鑑賞体験の提供のために資料をデジタル化する取組を含むこと。

3. 学芸員養成課程の「博物館情報・メディア論」と本書

「博物館が行う事業」として、「①博物館資料に係る電磁的記録を作成(デジタル・アーカイブ化)し、公開すること」を担う人材の育成・確保については、2022(令和4)年に先立って、2012(平成24)年度から学芸員養成課程において「博物館情報・メディア論(2単位)」が設けられて、旧来の「博物館情報論(1単位)」と「視聴覚教育メディア論(1単位)」の内容は、「博物館展示論」や「博物館教育論」とともにその内容が含まれることになり、細目も以下のように掲げられた¹⁰。

博物館情報・メディア論 [2単位]

ねらい：

博物館における情報の意義と活用方法及び情報発信の課題等について理解し、博物館の情報の提供と活用等に関する基礎的能力を養う。

内容：

- 博物館における情報・メディアの意義
 - ・情報の意義（視聴覚メディアの理論と歴史を含む）
 - ・メディアとしての博物館（視聴覚メディアの発展と博物館）
 - ・ICT社会の中の博物館（情報資源の双方向活用と役割、情報倫理、学校・図書館・研究機関の情報化等）
 - ・情報教育の意義と重要性
- 博物館情報・メディアの理論
 - ・博物館活動の情報化（沿革、調査研究活動、展示・教育活動等）
 - ・資料のドキュメンテーションとデータベース化
 - ・デジタルアーカイブの現状と課題
 - ・映像理論、博物館メディアの役割と学習活用
- 博物館における情報発信
 - ・情報管理と情報公開
 - ・情報機器の活用（情報端末、新たなメディア経験等）
 - ・インターネットの活用
- 博物館と知的財産
 - ・知的財産権（著作権等）
 - ・個人情報（肖像権等）
 - ・権利処理の方法

以上の内容を「博物館情報・メディア論」が講義範囲とすることが示されたわけだが、この科目のテキストの一冊においては、「博物館・情報メディア論」の科目誕生には「必然性があり」、「それまでの「博物館情報論」と「視聴覚教育メディア論」を合体させた折衷の産物であるかもしれない。しかしその背景には、博物館に携わる人々の思いの変化があった。いうまでもなくそれは、

市民への情報発信という思いである」と「まえがき」されている¹¹。

あるいは、本科目について、「博物館情報・メディア論は従来の「博物館情報論」と「視聴覚教育メディア論」を単純に統合した科目であると考えがちであるが、実際にそこにあるのは統合というよりも再構築に近い¹²」という講義担当者からの見方もある（下線、筆者）。

「博物館情報論」と「視聴覚教育メディア論」の「折衷」「統合」「再構築」としての「博物館情報・メディア論」は科目設置からすでに10年の時間を超えて、300に近い全国の大学・短期大学等にある学芸員養成課程の必須科目として論じられている¹³。

同時に博物館の「情報・メディア化」は、2019（平成31）年以來の新型コロナウイルス感染症の拡大という災厄の中でのミュージアムの存在の開示と発信の継続と拡大にとって、本科目についてあらためて、その重要性の再認識を深化させたとも言える¹⁴。

また、コロナ禍のただ中での国立国会図書館によるジャパンサーチの正式公開の射程が、文化財等わが国の歴史的知的文化資源にあって、遍く範囲に及ぶものであることを示し、とりわけミュージアム（M）・ライブラリ（L）・アーカイブ（A）というMLAの領域とその連携に関わる状況を大きく進展させた10年であったとも考えられる。

4. ミュージアムにおける専門職能の職域の拡張

現在ももちろんなのだが、ミュージアムを牽引する動力の両輪は、2つのC、コレクション（Collection：収藏品）とキュレーション（Curation：企画）のCである。

東京国立近代美術館の本館の学芸系は独法化以前においては、企画・資料課と美術課の二課であった。前者はキュレーションの企画・渉外係、ライブラリの資料係、と教育・普及係の三係制で、後者はコレクションを美術作品の種別にしたがって係分けされていた。

第1部の「第2章 東京国立近代美術館本館の情報資料活動」において、2012（平成24）年、東京国立近代美術館が60周年を迎えるまでのライブラリの概要

を書いたが、その10年前、2002（平成14）年のアートライブラリの開室まで企画・資料課資料係にはライブラリは無かった。かつ所蔵の作品と資料が接点を、少なくとも常設展など作品展示のキュレーションの空間に作品と並置して、資料が並ぶことは基本無かった。これはニューヨーク近代美術館以来のホワイト・キューブ（White Cube）の理念の浸透のように当時は思われたのだが、展示場にある美術作品を補完的に説明するかの「資料展示」は、大概、忌み嫌われていたとまでは言わないが、避けられていたのは事実である。

その状況に少し変化をもたらしたのが、岸田劉生アーカイブの展示「岸田劉生 作品と資料（*Works and Archives*）」展（1996）だ。それらの経緯は、退職後、「MLA 連携は美術館の展示空間を少し変えたような、竹橋の近代美術館での私のキャリアから」と題する一文を『情報知識学会誌』に寄稿して記録した¹⁵。

「作品（M）」と「資料（LとA）」が混然一体となった会場作りで成功した展覧会、例えば2016（平成28）年の『みづゑ』『現代の洋画』『ヒュウザン』『生活』『エゴ』『多都美』等々の美術雑誌に関わり、あるいは創刊した北山清太郎と大正期新興美術の動向を活写した「動き出す！ 絵画 ペール北山〔清太郎〕の夢—モネ、ゴッホ、ピカソと大正の若き洋画家たち」展（和歌山県立近代美術館）などが強く記憶に残るものであるし、同種の趣向を醸し出す展覧会に遭遇する機会は確実に増している。

今日、美術館において作品（M）とライブラリ（L）やアーカイブ（A）の資料が、MLAの三者または作品とのLAの二者いずれかとの関係を観覧者へ開示する工夫が、節度ある範囲をもって浸透するまでには、実は意外と長い時間を要していたのである。

これなどはミュージアムにおいて拡張した領域の一つとしてのD、ミュージアムの中にあるあらゆる資料属性を越えてのドキュメンテーション（Documentation）活動の実践的成果と考えられよう。

課名には無いが、企画・資料課には教育・普及係があったが、美術館教育すなわちミュージアムにおけるエデュケーション（Education）もDのドキュメンテーションと同様な時期において、1990年代以降大きくミュージアムの中で成長した分野である。

そしてもう一つが第3のCである保存（Conservation）がやはり同時期に充実化している。かつてあったミュージアムの主役（両輪）であった2つのCはいま3つのCとDとEに拡張している。これらを総称してミュージアムの「基本のCDE」と呼んではいかがだろうか。

| | | | | |
|--------------|---|---------------|---|-----------|
| C: | + | D: | + | E: |
| Collection | | Documentation | | Education |
| Curation | | | | |
| Conservation | | | | |

これらの拡張の全般にかかわって、その活動を基底的に支えるのが、ミュージアムにおけるドキュメンテーションに代表される情報化の徹底と共有・連携であることの良き報告が、2023（令和5）年に刊行された『ミュージアム・ライブラリとミュージアム・アーカイブズ』において東京国立博物館を事例に執筆されているので、ぜひ参照されたい¹⁶。

5. 本書の構成とねらい

本書は、図書館情報学を学んだ後に国立美術館において、ミュージアムのライブラリからアーカイブへ、さらにコレクション情報に与る過程において、それらの情報の網の連鎖と連携について思考を重ねた三十余年のミュージアムでの現場体験と6年ほどの大学での教員体験から報告する小著である。

本書は、「来るべき「博物館情報・メディア論」」の「概説」たるべき領域を網羅するにはまったく足りないが故に、本稿に続く下記の3部をもって「博物館情報・メディア論」の「序説〔助走〕」として位置づけることが妥当であろうと考えている。

- 第1部 ミュージアムの中にライブラリを開く
- 第2部 アート・ドキュメンテーションと MLA 連携
- 第3部 アート・アーカイブ

この構成においての内容は、上述の「別紙2「大学における学芸員養成科目の改善」」の第2項の「○博物館情報・メディアの理論」に該当し、もっとも近接する文献としては、『博物館学Ⅲ 博物館情報・メディア論*博物館経営論』（学文社、2012）の水嶋英治氏（検討協力者会議副主査）による「第2章 博物館情報・メディアの理論」を敷衍するものとなるだろう。

第1部の「ミュージアムの中にライブラリを開く」プロセスの中から生まれたのが第2部の「アート・ドキュメンテーションと MLA 連携」である。

MLAの三者をつなげることに、とりわけ大きな役割があったのが「A」、すなわちアーカイブであり、そのことの気づきは、本文においても重ねて書いているレムケ名誉教授（Professor Emerita Antje Bultmann Lemke, 1918-2017, シラキュース大学, NY）によるキーノート・スピーチの論考「Art Archives: A Common Concern of Archivists, Librarians And Museum Professionals」であった。

アーカイブがミュージアムの作品とライブラリの資料、およびアーカイブそれ自体とをつなぎ止める^{にかわ}膠のようなもの、「膠着体」となることに気づいたとき、三者の連携のトライアングルが明確なイメージとなって立ち現れた。

そのことを広く記述する枠組みとして「作品の「生命誌」を編む」として中村桂子氏の「生命誌」観を援用したのが、第3部に収めた「アート・アーカイブズを再考^{レビュー}するということ」と題した第9章である。

探求の対象としてのM、あるいは拡張して主題（S: Subject）とLの二項関係から、次のステップとしてA（アーカイブ）を加えて、三項関係たるMLAの連携へ、さらにSLAの連携のトライアングルを目指すとき、「新たな」かつ「汎用性」のある「調査^{リサーチ・メソッド}研究法」が拓かれる可能性について論じたのが本書の終章「MLAを越えて—新たな調査^{リサーチ・メソッド}研究法としてのMLAからSLAへ」である。

以上、序として本書の三部構成について紹介したが、本論自体は、ほぼ同時に並行して重ねた思考の実験と資料を扱う手わざの行きつ戻りつの過程から書き紡いだ諸篇から成るので、重複と転回が繰り返されリニアな展開には成りえていないことは、著者自身がもっとも認識しているところである。

「ミュージアムの中のライブラリでアーカイブについても考えた」ことども

の「体験的 MLA 連携論のための点綴録」として一書にまとめたのが本書であることをもって、ご寛恕いただけましたら幸いです。

註

- 1 : 『神奈川大学評論』2023, 104, p.170-171.
- 2 : <https://www.europeana.eu/en> [参照2023-09-30]
- 3 : <https://dp.la/> [参照2023-09-30]
- 4 : <https://jpsearch.go.jp/> [参照2023-09-30]
- 5 : 梅棹『情報の文明学』（中公叢書, 1988）／『梅棹忠夫著作集』中央公論社, 1991, 14巻, p. 134.
著作集の当該巻の「月報」の12回（1991.8）には、奇しくも、後に国立国会図書館長としてそのデジタル化を大きく進めた長尾真（執筆時、京都大学工学部教授・国立民族学博物館併任教授）による「博物館活動の情報化」が寄稿されている。
- 6 : [ブログ] 博物館学を読む～守れ！文化財～国際博物館の日記念講座「博物館か、博情館か？一次資料、二次資料とは何か？」2014年5月18日
<https://rekitomo2000.seesaa.net/article/a64755013.html> [参照2023-09-30]
- 7 : 梅棹『情報の文明学』（中公叢書, 1988）／『梅棹忠夫著作集』1991, 14巻, p. 133.
- 8 : <https://bunka.nii.ac.jp/> [参照2023-09-30]
- 9 : https://www.bunka.go.jp/seisaku/bijutsukan_hakubutsukan/shinko/kankei_horei/pdf/93697301_04.pdf [参照2023-09-30]
- 10 : 「1.2 学芸養成課程の改訂と「博物館情報・メディア論」『博物館情報・メディア論』放送大学, 2013, p.11-12.
これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議『学芸員養成の充実方策について「これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議」（報告）』平成21年2月同報告所収「別紙2「大学における学芸員養成科目の改善」https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2009/02/18/1246189_2_1.pdf [参照2023-09-30]
- 11 : 編集代表小笠原喜康「まえがき」『博物館情報・メディア論』ぎょうせい, 2013, p. i.
- 12 : 山内利秋「博物館情報メディア論の展開」『九州保健福祉大学博物館学年報』2012, 1, p. 33.
- 13 : 学芸員養成課程開講大学一覧（令和5年4月1日現在）291大学
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bijutsukan_hakubutsukan/shinko/about/daigaku/ [参照2023-09-30]
- 14 : 田良島哲「持続可能なミュージアムのDXとは（第1回）：前口上」（公開：2021年9月25日22：11）に続く連載
https://note.com/nijo_gawara/n/n366ea75a7bf4 [参照2023-09-30]
田良島「デジタルアーカイブスタディ 行かない／行けない人のためのデジタル

ミュージアムと、それを支えるデジタルアーカイブ」2020年07月01日号

https://artscape.jp/study/digital-achive/10162857_1958.html [参照2023-09-30]

15：水谷『情報知識学会誌』2020, 30(1), p.62-66.

16：水谷・阿見雄之・山崎美和・小野美香「5章 ミュージアムの中の情報連携」『ミュージアム・ライブラリとミュージアム・アーカイブズ』（博物館情報学シリーズ・8）樹村房, 2023, p.236-280.

* らん-しょう [-シャウ] 【濫×觴】

《揚子江のような大河も源は觴（さかずき）を濫（うか）べるほどの細流にすぎないという「荀子」子道にみえる孔子の言葉から》物事の起こり。始まり。起源。

** てん-てい 【点×綴】

[名]（スル）《慣用読みで「てんせつ」とも》ひとつひとつをつづり合わせること。また、物がほどよく散らばっていること。てんてつ。

出典：デジタル大辞泉

第 1 部

ミュージアムの中にライブラリを開く

第1部 解題

- 第1章 2019「ミュージアム・ライブラリの原理と課題 — 竹橋の近代美術館で学んだ5つの命題から」
初出：『現代の図書館』(日本図書館協会) 57(3), p. 107-117.
旧題「ミュージアム・ライブラリの原理と課題 — 竹橋の近代美術館での30年から伝えられること／伝えたいこと」
2023『ミュージアム・ライブラリとミュージアム・アーカイブズ』(樹村房) 博物館情報学シリーズ・8に収録
- 第2章 2012「東京国立近代美術館本館の情報資料活動」
初出：『東京国立近代美術館60年史 — 1952-2012』 p. 159-168.
2023『ミュージアム・ライブラリとミュージアム・アーカイブズ』(樹村房) 博物館情報学シリーズ・8に収録の長名大地著「2章 ミュージアム・ライブラリ」が2018年以後の東京国立近代美術館本館の情報資料活動の様相を詳述している
- 第3章 第1部のための補論 3篇
- 第1篇 1988「一年前の夏, IFLA 東京大会をふり返って — 美術図書館分科会を中心に」
初出：『図書館と本の周辺』(ライブラリアン・クラブ) 12, p. 19-25.
- 第2篇 2004「ミュージアム・ライブラリの可能性 — 人と情報のネットワークキングのもとに」
初出：『図書館雑誌』(日本図書館協会) 98(7), p. 438-441.
- 第3篇 2009「夢の砦 — 展覧会カタログのために」
初出：『展覧会カタログ総覧』(日外アソシエーツ) p. i-ii.

1985(昭和60)年の春、竹橋の東京国立近代美術館の第一機動隊に通じるお濠側の脇道に接する通用口から4階の事務室へと続く、くすんだ長い階段を上がって新しい勤務場所にたどり着いた時、わたしには図書館員はおろか美術館の学芸員の現場の勤務経験も皆無だった。いまは筑波大学となっている図書館

情報大学に編入学生として2年間学び、1984(昭和59)年の秋の国家公務員試験上級乙種図書館学の合格に拾われて、国立大学図書館への道がほぼ固まりかけた時、二つ三つの偶然が掛け合わさって、このような場で、東京国立近代美術館企画・資料課資料係配属の文部技官(研究職)としての仕事が始まった。

東京国立近代美術館は戦後1952(昭和27)年の12月にわが国初の国立美術館として中央区京橋の旧日活ビルを得て開館した。わたしが着任してから27年目の2012(平成24)年に60周年を迎えているが、国立美術館の誕生は、湯島聖堂大成殿での文部省博物館博覧会を契機とする国立博物館の発足(1872(明治5)年)に80年遅れてのことになる。

京橋に誕生した国立近代美術館は京都国立近代美術館の開館(1963年)に伴い、東京国立近代美術館と改称し、さらに1969(昭和44)年には京橋から現在の地、竹橋へ移動していた。京橋での開館時、鎌倉の神奈川県立近代美術館(現在本館は葉山)と同じ京橋のブリヂストン美術館(現、アーティゾン美術館)に次いでの開館だが、ニューヨークの近代美術館(MoMA, New York)をモデルとしてファインアートにとどまらず、建築・デザイン・映画をも射程に入れて、特に現在の国立映画アーカイブも発足時の国立近代美術館において基礎がはじまっていた。

わが事に即して言えば、開館時に遅れることわずかの時間で、専任の資料担当者が、国立大学図書館から異動されており、その方の定年退職のタイミングでわたしの着任が、引き継いだという次第なのである。

さて、17年の京橋時代を経て竹橋へ移転し、ブリヂストン美術館の石橋財団によって寄贈された建築は、ほぼ30年を閲して大規模改修工事の末に、2002(平成14)年、はじめて公開のアートライブラリを得たのである。

つまり前任者の三十余年の在職期間においても、わたしの着任以来の17年間においても、そこには資料はあれども、資料室自体その姿は文字通り影も形もなかったのである。

幸い、2002年の新装改築から2017(平成29)年3月末までのわたしの在職期間においては、ライブラリのあるライブラリアンとして、ここでの後半の15年間を過ごすことができたことは、なによりもの幸いであった。

この間の体験に基づいて、アートライブラリの現場を離れて一年後に書いた

のが、第1章である。この第1章が、ミュージアム・ライブラリの理想的側面を描出したものであるのに対し、『東京国立近代美術館60年史』に寄稿の第2章は、より現場の実像と課題を記述したものである。

東京国立近代美術館の60周年は2012年であるから、アートライブラリの開室から10年後でもあり、まず書かねばならなかったことは、ライブラリの不在、それは兎にも角にも物理的なスペースが無いことへの愛憎、というよりも大規模増改築案の浮上がなければ永遠に解消できない不可能性を抱えて資料担当を担うことの困難であった。

今日、多くの美術館や博物館で公開の図書室が設けられ、その公開による成果も多大に成長しているが、実のところこのスペースの問題はミュージアム・ライブラリの永遠の課題と言ってよい。

第1章においてMoMAのC.フィルポット氏の言を借りて、命題の一つに掲げた「分担／分散と集中」は、実にこの即物的な、かつ最も手強く、共有可能な難敵な課題へ向けた解の示唆を願って書いたものなのである。

1985年の着任時から第2部「アート・ドキュメンテーションとMLA連携」に展開していくほぼ10年の間に、わたしが遭遇した僥倖は3つあった。

その第1は、着任の翌年に開かれた国際図書館連盟(IFLA)東京大会の開催(1986)。

第2は、IFLA東京を機縁に翌々年の1988(昭和63)年のIFLAシドニー大会の美術図書館分科会に招かれたこと。

第3は、1990(平成2)年の1-2月にかけてUSIA-IVPに招かれてアメリカの美術図書館の著名館を東海岸から西海岸へ横断して、徹底して観て回れたことである。

IFLA東京大会の効能の大事な一つは、第1章で述べたジェーン・ライトが語った「一人図書館員」の胸中を共有しながら、目を美術館の館の外へ向けさせたことであったが、第3章の補論の第1篇に大会の様様を書いている。ちなみにこの一篇はIFLA東京大会の展示会を仕切った経団連図書館のS氏や松竹大谷図書館のOさんら、大手町周辺の専門図書館員が集まる「ライブラリアン・クラブ」の機関誌『図書館と本の周辺』に書かせていただいたものである。末尾に図書館情報大学で専門図書館論を講じて下さったS先生への追悼

の言を添えていた。

IFLA シドニー大会は第3部のアートアーカイブを考える機縁となったレムケ先生の美術図書館分科会でのキーノート・スピーチが、大きな方向性を開示してくれた。と同時に、帰国後に開いた「美術図書館を考える会」（計3回開催）が1989（平成元）年4月のアート・ドキュメンテーション研究会（現学会、JADS）の直接的な機縁となったのである。その時の世話人がほぼそのまま発足時のJADSの幹事へと継承されていった。

1990年のUSIA-IVPは当時、東京アメリカンセンターのライブラリアンだったKさんの推挙によるものだったが、その旅程と見学先に含まれていたMoMA ライブラリとコロンビア大学エイヴリー美術・建築図書館の体験が、実は、東京国立近代美術館での岸田劉生アーカイブの受け入れと並んで、もっともわたしにMLA連携にかかわる啓示をもたらしたのものであったのである。

第3章の補論第2篇の「ミュージアム・ライブラリの可能性 — 人と情報のネットワークのもとに」は、「専門図書館・最近のトピックス」の一篇として日本図書館協会の『図書館雑誌』に寄稿したもののだが、ミュージアム・ライブラリが公開の専門図書館であることとその可能性を2004（平成16）年3月に東京都現代美術館、横浜美術館とともに構築した美術図書館横断検索（ALC）の「人と情報のネットワーク」に即して紹介した小論である。今日のALCは美術図書館連絡会（ALC: The Art Library Consortium）の運営のもと14館の参加にまで成長している。

補論第3篇は、ALCに参加のいずれの美術館も第一等の資料群としてまっさきに掲げる展覧会カタログについて、『展覧会カタログ総覧』の巻頭に寄せた小文である。冒頭、2007（平成19）年に開館した国立新美術館において、同館のアートライブラリーの開室にかかわって同館のニュース誌に寄せた「夢の砦 — 展覧会カタログのために」を引用している。展覧会カタログの国内収集については第1章の命題の一つに掲げた「分担／分散と集中」ともきわめて緊密に関わっていることを確認していただけたら幸いである。

第1章

ミュージアム・ライブラリの原理と課題 竹橋の近代美術館で学んだ5つの命題から

はじめに — 5つの「命題」から学んだこと

筆者は1985(昭和60)年4月から2018(平成30)年3月末日に至る三十余年、竹橋(千代田区北の丸公園)の東京国立近代美術館のアートライブラリに勤務し、18年の春から現職に異動している。

途中、2年余、乃木坂(港区六本木)の国立新美術館設立準備室に併任したが、竹橋のアートライブラリがキャリアのホームであった。ただし、着任時にはライブラリを持たない、屋根裏に書架の並びだけのある企画・資料課資料係員、文部技官研究職が私の肩書であった。当時、つまりは独立行政法人国立美術館以前(2001年3月以前)においては、東京・京都・奈良の国立博物館同様、東京・京都の国立近代美術館、国立西洋美術館、国立国際美術館は文化庁施設等機関である博物館相当施設であり¹、そこに働くいわゆる学芸員は技官(研究職)であり、事務官とは別に存在し、その世界にいまは筑波大学となっている図書館情報大学卒が紛れ込んだのだった。西洋史を国情大以前の大学で学んだが、美術史も美学も博物館学や学芸員資格も無縁のままに美術館勤務が始まったから、「門前の小僧」状態であった。

当時、公開の美術館の図書室は東京都美術館にある限りであり²、上野の東京国立博物館に資料館はあったが、国立美術館には美術書と書架はあっても、公開のアートライブラリは一館とて無かったから、勢い、海外の art library の世界に知恵と情報を頼むほか無かったし、その動勢に同じく目を向けているらしい関係者も、のちにアート・ドキュメンテーション研究会(現学会, Japan Art Documentation Society, 1989-, 略称 JADS: www.jads.org) をともに立ち上げた当時都立中央図書館に勤務の H さんと武蔵野美術大学美術資料図書

館のOさんを除けば、ほぼ皆無のように見受けられた。

現在のJADSやALC（美術図書館連絡会、美術図書館横断検索のためのコンソーシアム：alc.opac.jp）の活動、あるいは新規開館あるいは大規模リニューアルの美術館には、ほぼ必置で公開のアートライブラリが計画図面に落とし込まれている現況は、まさに隔世の感がある。時間は確実に過ぎた。

けれども、本稿を準備する過程で、その時間の中で感得した知恵と原理を振り返るならば、私のキャリアの極ごく初期に遭遇した英米の美術図書館協会（ARLIS: Art Libraries Society）のファウンダーや主要メンバーがかつて提示した命題や問いかけが、一貫して、直面する課題の解決における重要な参照系であり続けたことがあらためて確認されるのであった。

故に旧聞に属しはするが、本稿においては以下、5つの「命題」から学んだことを紹介するをもって、博物館情報学シリーズの『ミュージアム・ライブラリとミュージアム・アーカイブズ』序章—イントロダクションとなり、シリーズ最終巻の巻頭に相応しからんことを願いたい。

1. ARLIS ファウンダー、TF の命題から学んだこと — その1 つながること

ARLISは1969年に英国において産声を上げた。1972年に北米に飛び火して、ARLIS/UK & Ireland（以下A/UK）およびARLIS/NA（North America、以下A/NA）と名称し、ほかにARLISを名乗る組織は、オーストラリア・ニュージーランド、オランダ、北欧、ドイツ等に拡大し、上述の日本のJADSもまた、ARLISを名乗りはしないが（その由縁は後述する）、ARLIS類縁組織（affiliated-organizations）として位置づけられており³、例えば、A/UKの機関紙*Art Libraries Journal*（以下ALJ）、A/NAの*Art Documentation*とJADSの『アート・ドキュメンテーション研究』の相互交換などの交流は継続されている。

ARLIS誕生の直接のきっかけは、イースト・アングリア大学図書館の副館長であったトレヴァー・ファウセット（Trevor Fawcett、以下TF）が*Library Association Record*誌に投稿した一通の手紙から始まる⁴、と定説されている。

註

- 1 : 2007年に国立新美術館が、2018年に国立フィルムアーカイブが新規開館し、独立行政法人国立美術館は6機関となり、いずれも図書室を有し、後述のALCへも京都を除き参加している(2019.9.23時点)。
- 2 : 野崎たみ子「美術図書室の四半世紀」『美術フォーラム21』2000, 3, p.76-79.
- 3 : 入手先<<https://www.arlisna.org/about/affiliated-organizations>>. (参照:2019-09-23)
- 4 : Trevor Fawcett. ART LIBRARIANS, *Library Association Record*. March, 1968. reprinted in 5).
- 5 : Penny Dade comp. *ARLIS at 40: a celebration*. London: ARLIS/UK & Ireland, 2009. ちなみに2019年はA/UKの誕生50周年にあたる。
- 6 : Philip Pacey ed. *Art Library Manual*. London: Bower, 1977. 423p.
- 7 : Trevor Fawcett. The compleat art librarian. *ARLIS Newsletter*. 1975, 22, p. 7-9, 1975. reprinted in *A Reader in Art Librarianship*. München: Saur, 1985.
- 8 : Lois Swan Jones and Sarah Scott Gibson. *Art Libraries and Information Services: Development, Organization and Management*. Orland: Academic Press, 1986. 322p.
- 9 : Joan M. Benedetti ed. *Art Museum Libraries and Librarianship*. A Co-Publication of ARLIS/NA and Scarecrow Press, 2007, 312p.
- 10 : Mona L. Chapin. Jane Wright: Art Librarian. *Art Documentation*, 2008, 27(2), p. 56-58.
- 11 : Paula A. Baxter ed. *International bibliography of art librarianship: an annotated compilation*. München: K.G. Saur, 1987. V, 94p.
- 12 : 水谷「ジェーン・ライト (Jane Wright, 1879-1929) ふたたび」『アート・ドキュメンテーション通信』2010, 84, p.14-15. 全訳文の掲載『アート・ドキュメンテーション通信』1989, 2, p.8-10.
- 13 : Mizutani. The new trend to share research materials and information among national art museums in Japan, *ALJ*, 1988, 13(4), p. 11-14.
- 14 : Mizutani. The Japan Art Documentation Society and art librarianship in Japan today, *ALJ*, 14(3), p. 5-6.

あとがき

博物館や美術館の中の公開の図書室。1985（昭和60）年、筆者が東京・竹橋の近代美術館に勤務を始めたとき、上野に2つ、東京国立博物館の資料館と東京都美術館の美術図書室だけがあった。そして横浜美術館が丹下健三の設計で開館した時、1989（平成元）年、その建築の向かって左手の一翼が堂々とした美術図書室として姿を見せて、その空間に足を踏み入れた一瞬のことはいまもなお忘れられない。

竹橋の自らの美術館には図書室は無かった。資料はあった。棚も何とか……、の状況にあって、知己を得ていた当時東京アメリカン・センターのライブラリアンであったK女史の推輓で、米国文化情報局（USIA: United States Information Agency）のインターナショナル・ビジター・プログラム（IVP: International Visitor Program）へ参加する機会を得たのが、1990（平成2）年の1月からの約2カ月。

ニューヨーク、ワシントン D. C., ボストン、フィラデルフィアから北米の真ん中のメンフィスを経由して、LA まで、事前に調べられるだけの美術館図書室はほぼすべて見て回った。その時も IFLA 東京大会（1986）で築かれていた人的ネットワークと北米美術館協会（ARLIS/NA）のバックアップが大きかった。

すでにボストン美術館の美術図書室の N. アレン女史からは、‘Linking art objects and art information’ と銘打って特集した1988年の *Library Trends* が贈られていたから、NY では、‘At the confluence of three traditions: architectural drawings at the Avery Library [of Columbia University]’ の著者である A. ヒラル女史を訪ねた。

本書のジャケット袖にある写真はその時のもので、後日、コロンビア大学の学内報の一面に載った。わたしもまだ30代の前半だった。

MLA 連携のイメージの源泉には、IFLA シドニー大会でのレムケ先生の基調講演（1988）、Avery Library のこの文献と実地の見聞（1990）、そして岸田劉生アーカイブ（1993）があった。

本書はこのような過程で出会った多くの人たちとの議論とさまざまな連絡や資料との遭遇によって、その時々、多くは求めに応じて書き続けた、論考とは言い難いような文章を3部に構成して、主たる篇には章を、コラムよりは長いが章には満たない短文は補論として、再録したものである。

初出の執筆のその時々でのタイミングでの執筆に向けた熱量をそのままに残すことを優先し、本書においては微細な語句表記の修正に留めて、加筆等は敢えて行わなかった。

MLAの定義、図版あるいは由来など、諸篇で重複のあること、用語、記述に揺れのある点など、通読にふさわしくないところが多々あるのは、これらすべては著者の責に由来しており、お詫びしたい。

初出時の時々にお世話になった編集をご担当された方々にあらためてお礼申し上げたい。また、1990年、『現代の図書館』に掲載の「アメリカにおける美術図書館の現状と課題—その歴史・組織・戦略」において、写真の掲載を快諾された当時 MoMA のライブラリ・ディレクターであった C. フィルポット氏、同氏とは1986(昭和61)年の IFLA 東京大会でお会いして以来、1990年に USIA-IVP の旅路においては NY で、また2000年の在外研修では、すでに故国英国に帰られていたのでロンドンで再々会の機会を得るとともに、第1章のミュージアム・ライブラリの核となる「部分と全体」「分担と集中」にかかわる原理を示唆してくださった。

もうお一人、MLA 連携を明解に示すスライドの利用を快諾くださった、当時、RLG (Research Libraries Group, Inc.) を本務とされていた J. ミハルコ氏にお礼申し上げたい。MLA 連携のアイデアがほぼ同時に日米で誕生し、ライブラリからライブラリを越えて、ミュージアムとアーカイブを巻き込んで連携が展開することに強く確信を持たせてくださった。

また、1989年のアート・ドキュメンテーション研究会の創設以来、多くの会員と都度都度の開催企画に足を運んでくださった方々からの示唆やご意見なくしては、本書収録の諸篇も世に出ることはなく、あらためてお礼申し上げたい。

手許に残したつもりが見つからなかったジャケット袖の写真掲載の記事を発掘してくださったグッド長橋広行さん、Japanese and Korean Studies Librarian, University of Pittsburgh と坂井千晶さん、Japanese Studies Librarian, C.

あとがき

V. Starr East Asian Library, Columbia University にはこの場をお借りしてお礼申し上げたい。コロンビア大学のアーカイブ力に感嘆の念を禁じ得なかった。

煩瑣な編集と校正に労を惜しまれなかった樹村房の安田愛さん、出版の機会を与えてくださった大塚栄一社長に感謝申し上げます。

2025年1月31日

水谷長志

本書の出版は、跡見学園女子大学学術図書出版助成による。

[著者紹介]

水谷 長志 (みずたに・たけし)

1957年生まれ。跡見学園女子大学文学部教授 (司書課程)。

1980年金沢大学法文学部, 1985年図書館情報大学図書館情報学部卒, 同年4月東京国立近代美術館企画・資料課資料係文部技官研究職として入職, 以後, 2018年3月末日迄同館企画課情報資料室長, 独立行政法人国立美術館本部事務局情報企画室長などを務めて, 2018年4月から現職, 現在に至る。

単著 『図書館文化史』 図書館情報学の基礎・11 (勉誠出版, 2003)

編著 『MLA 連携の現状・課題・将来』 (勉誠出版, 2010)

『日本美術の資料に関わる情報発信力の向上のための提言Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』 (JAL プロジェクト実行委員会, 2015-2017)

『ミュージアム・ライブラリとミュージアム・アーカイブズ』 博物館情報学シリーズ・8 (樹村房, 2023)

ミュージアムの中のライブラリで アーカイブについても考えた 体験的 MLA 連携論のための点綴録

2025年3月12日 初版第1刷発行

検印廃止

著者 水谷 長志

発行者 大塚 栄一

発行所 株式会社 **樹村房**

〒112-0002

東京都文京区小石川5丁目11-7

電話 03-3868-7321

FAX 03-6801-5202

振替 00190-3-93169

<https://www.jusonbo.co.jp/>

組版・印刷／亜細亜印刷株式会社

製本／株式会社渋谷文泉閣

©Takeshi MIZUTANI 2025 Printed in Japan

ISBN978-4-88367-403-9 乱丁・落丁本は小社にてお取り替えいたします。